

問題一 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

一般に言語は意味を持った《A》であると言われている。しかしながら、それは脊椎骨を持った動物と同じような意味においては、我々はどこにも意味を持った《A》というものを観察することが出来ない。言語の具体的な経験は、ただ観察者である我々が、或る《A》を聴いて或る意味を思い浮かべた時、或いは、或る思想を《A》によって表現した時にのみ経験し得るのである。同じようなことが《B》についても言い得る。紙面に書かれた《B》は一つの視覚的印象である。それだけについて見れば、それは石面の亀裂と何ら異なる所が無いものである。我々がそれを言語であると考えるのは、その《B》によって或る意味を理解するという働きの存在があるからである。《B》によって或る意味を理解したことから、《B》が意味を持つていると考えるのは、《C》の的な作用を客体的に投影することであって、比喩的にはそういう説明が許せるであろうが、それは言語の具体的な経験をそのままに記述したことはない。我々が言語を研究するに当たっては、何よりもまずこの具体的な経験に立脚し、対象をそのニヨジツの姿<sup>①</sup>において把握することに努力しなければならぬのである。最も具体的な言語経験は、「語ること」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」において経験せられる事実であって、このような《C》の的活動を考えずして、我々は言語を経験することは出来ないのである。もちろん我々が耳を閉じ、目を閉じることによって、日本語の存在が無くなるとは考えられない。しかしながら、その時考えられている日本語は、やはり我々以外の第三者甲乙丙丁によって語られたり、読まれたりすることによって存在しているのである。如何なる人によっても語られもせず、読まれもせずして言語が存在していると考えことは単に抽象的にしかいことが出来ない。即ち「a」の《C》の的活動をよそにして、言語の存在を考えることは出来ないのである。自然はこれを創造する《C》を離れてもその存在を考慮することが可能であるが、言語はいつ如何なる場合においても、これをサンシュツする《C》を考えずしては、これを考慮することが出来ない。さらに厳密に言えば、「b」。

(時枝誠記「国語学原論」より)

問一 傍線部①②のカタカナを漢字に改めよ。

問二 文中<sup>㉔</sup>㉕㉖㉗に当てはまる語をそれぞれの群㉘㉙の中から選び、符号で答えよ。

A ア、	リズム	イ、	パターン	ウ、	文化	エ、	音声	オ、	記号
カ	語彙								
B ア、	文字	イ、	絵画	ウ、	楽譜	エ、	数字	オ、	文明
カ	音符								
C ア、	本質	イ、	本体	ウ、	主体	エ、	客体	オ、	実態
カ	実質								

問三 文中に次の文を入れるとすれば、どこが適当か。この直後に来る文の最初の五文字を書き抜くことで示せ。或いは言うかもしれない、我々が「聞いたたり」「読んだり」することに関せず、我々は言語の存在を考慮することが出来るではないかと。

問四 空欄「a」に当てはまる語を次の中から選び、符号で答えよ。

A 物	B 集団	C 人類	D 文化	E 民衆
F 我	G 我ら			

問五 空欄「b」は、この文章の《結論》が述べられている所である。その《結論》を次から選び、符号で答えよ。

- 1 言語は微妙なニュアンスを持つ、一つの有機的な生命体であると言える。
- 2 言語は「語ったり」「読んだり」する活動それ自体であるということが出来るのである。
- 3 言語は人間の魂のこもった、たいせつで美しい芸術品である。
- 4 いわゆるコミュニケーションは、言語がなければ絶対に行うことが出来ないものである。
- 5 人間は具体的事物を抽象化するという、非常に優れた能力を持つ動物である。
- 6 人間には「語ったり」「読んだり」する具体的経験が何より大事である。

問六 次の各群から一文ずつ選び、順に組み合わせると、筆者・時枝誠記の〈辞書〉についての考え方がとらえられる。A・B・C各群から適した文を選び、符号で答えよ。

A群

- 1 辞書は単語の意味を説明したものであって、難解な文章を読みこなしたり理解したりするために不可欠なものである。
- 2 言葉を使う人が、最も適切な言葉を使うことが出来るように、表現能力の幅を広げられるよう配慮されているのが辞書である。
- 3 厳密に言えば、辞書に標出されているもの自体は、語とは言い得ないもので、単なる文字であり、線の集合にすぎない。

B群

- 1 文章を理解するとは、筆者の心を知ることであり、生きたコミュニケーション活動の存在意義を認識せしめずにはおこなぬものである。
- 2 しかし、この標識とそれに加えられている説明等によって、辞書の検索者は一つの言語的体験を獲得できるのである。
- 3 ゆえに辞書を見れば、その国民がどのような文化的活動を行ってきたかを見渡し、その集積に接することが出来る。

C群

- 1 このように考えるならば、辞書に言語が存在するということは、言い得ないことだということになるのである。
- 2 他国民とのコミュニケーションはもとより、自国民とのコミュニケーションにも、辞書は欠かすことが出来ないということになるのである。
- 3 そう考えると、辞書は単に語を登録した台帳ではなく、人間の心の触れ合いの中に生かすべきものになってくるのである。

問題二 次は高村光太郎の「ぼろぼろな駝鳥<sup>だちよう</sup>」という詩である。読んで、後の問いに答えよ。

- 1 なにがおもしろくて駝鳥を飼うのだ。
- 2 動物園の四坪半のぬかるみの中では、
- 3 足が大股すぎるじゃないか。
- 4 首があんまり長すぎるじゃないか。
- 5 雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろすぎるじゃないか。
- 6 腹がへるから堅パンも食うだろうが、
- 7 駝鳥の眼は遠くばかり（A）じゃないか。
- 8 <sup>①</sup>身も世もないように（B）じゃないか。
- 9 瑠璃色<sup>るり</sup>の風がいまにも吹いてくるのを（C）じゃないか。
- 10 あの小さな素朴な頭が無辺大<sup>②</sup>の夢で（D）じゃないか。
- 11 これはもう駝鳥じゃないじゃないか。
- 12 人間よ、
- 13 もうよせ、<sup>③</sup>こんなことは。

問一 空欄（A）～（D）に当てはまる語を次の中から選び、符号で答えよ。

- |            |            |         |          |
|------------|------------|---------|----------|
| ア、気にしている   | イ、恐れている    | ウ、見ている  | エ、逆まいている |
| オ、燃えている    | カ、うずくまっている | キ、壊れている | ク、困っている  |
| ケ、待ちかまえている |            |         |          |

問二 この詩を内容に従って区分けすると次のようになる。それぞれに該当する部分を、行の番号で答えよ。(複数の数字が入る箇所あり)

- a 問題の提示                      b 駝鳥の外形を描く                      c 駝鳥を内面から描く  
d bとc、二つに分けた抗議を一つにまとめる                      e 強く訴えかけ、抗議する

問三 傍線部①「身も世もない」は「常態ではいられない」意の慣用語である。では、次の( )の中に入る言葉は何か。適語を入れ、それぞれの【 】内に書かれている意味をあらわす慣用語を完成させよ。

- A 身に( )。 【人の不幸・苦しみなどを、まるで自分の上に起こったことのように悲しく感じる。】  
B 身に( )。 【身分不相応である。または、自分の力量や業績をこえている。】  
C 身に( )がある。 【思い当ることがある。】  
D 身の( )がない。 【その場にいるのが辛い。】  
E 身も( )もない。 【あまりにも直接的で、なんの情緒も含みもない。】  
F 身を( )にする。 【労苦をいとわず、懸命に働く。】

問四 傍線部②はどんなことか。次の中から選び、符号で答えよ。

- ア、自由を取り戻し、故郷の大地を走り回ること。  
イ、動物園を抜け出し、理解のある人間に飼われること。  
ウ、快適な環境を得、動物園で寿命を全うすること。  
エ、自分を見世物にした人間どもに復讐すること。

問五 傍線部③は、どのようなことを指しているのか。「駝鳥」「動物園」「雪」「自由」という言葉を必ず入れ、三十五字以内で答えよ。

問六 この詩に使われている表現法を次の中から三つ選び、符号で答えよ。

- ア、擬人法                      イ、対句法                      ウ、倒置法                      エ、擬声法                      オ、擬態法  
キ、対句法                      ク、引用                      ケ、反復                      コ、比喩                      カ、提喩法

問題三 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

少し言葉は変だが、私が物を買うのは、一生に「今この一個」のみ買っているという行為の連続に過ぎないのである。だから横<sup>①</sup>に買っているのではなく、いつも縦に買っているのだとでもいおうか。買うということの単なる繰り返しではなく、禅語を借りれば「前後截断<sup>\*</sup>」で、過去からも未来からも解放されている「現在」でのみ買っている行為なのである。禅僧がよく「這裏<sup>しやう</sup>」とか「箇裏<sup>こり</sup>」とか「箇中<sup>ちゆう</sup>」とかいうが、面白い表現で「現下のこのもの」という意である。買うとか持つとかいうことは私には、いつも「今」「この一つ」というキョウチでの出来事に過ぎない。数多くを買うというような意味での買い方ではない。事実物の数が多くなっているのだから、それは詭弁だという人があるかも知れぬが、そうではない。実は、物を持つとは、全一<sup>③</sup>に持つという意味がなければならぬ。その全一とは数多い物の中の一つではなく、一つそれ自身の一つなのだ。このことはちよつと分かりにくいかも知れぬが、真に美しいものは、ただ色々あるもの一つではなく、左右のない現下の一つなのだ。それは数の世界にあるよりも、数なき一つなのだ。【A】それを多数の中の一つとしてより持たないなら、美しさを見届けての持ち方とはいえぬ。私は量の世界で買っているのではないのである。

先日新聞を見ていたら、蒐集家話が出ていて、一人は徳利<sup>ちやくり</sup>ばかり集め、一人は制札<sup>ちやく</sup>ばかり集めている例が挙げられていた。そういう蒐集<sup>\*</sup>こそ何より数がものをいうが、私はそういう性質の蒐集には、【B】興味がないのである。それは蒐集としても畢竟<sup>\*</sup>二義的な性質を出ないものである。なぜなら数量が大きな目的で、つまらぬものでも徳利とか制札とかなら何でも集めるということになってくる。いわば横に広く買っているに過ぎなく、質の方は二次的になってくる。「多」に値打ちを置いて「質<sup>⑤</sup>」の方を主に置かぬ。【C】、美しさを主体に推すとそんな見方では近づくことが出来ぬ。縦に見るというのはこの機微に触れることである。だから仮に幾度美しいものを買っても、それは幾度も買うのではなく、「その一つ」を「一度きり」より買っていない意味がある。ここで一度とはただの一回

ではなく、「永遠の今」の中に起こる一回である。そういう買い方でなくば、買い得たとはいえぬ。たとえ金では買ったとしても。

もつとも民藝館の陳列をした経験からすると、おなじような種類のものが幾個かあると、陳列を一層美しくさせる場合が起こる。そういうために、私として数で物を買う場合がないことはない。しかしそういう時でも、質を充たすものでない限り、量だけでは買わぬ。ただ、数多く集めるとなると量が表に出て、質は裏に廻されてしまう。その結果は、つまらぬものまで集めるといふ悲喜劇に落ちる。私はそういう蒐集に興味がないから、ただ「持ち過ぎる」といわれると、そんなはずはないかと考えざるを得ぬ。数など考えて買ったことはないからである。【D】世間には、「茶盃を百個集める」などと力んでいる蒐集家があるが、私には愚かに見えてならぬ。数で集めて何になるのかと思う。百個に興味があつて、一個なら興味がないのである。「この一個こそ」という持ち方が基礎にならぬと、たとえ百個持つても、実は一物も持たないのと等しかろう。私はそういう買い方、持ち方をしたくない。私が物を買うのは、いつも始めての想いで買うのである。一々が初恋なのだとでもいおうか。反復でもなく、<sup>⑧</sup>チョウフクでもないのである。新鮮なのであるから、一つ一つが始めての買い物だという意味がある。【E】一つ一つを眼一ぱい心一ぱいで見ているので、それは昨日見たとか、幾度か見たとかいう見方ではない。即今より以外には見ていないのである。初恋は一度きりのもので、幾度もあれば初恋ではないというであろうが、本当の初恋ならそんな簡単な物差<sup>⑨</sup>では決められない。

(柳宗悦「民藝四十年」より)

⑩\*切断…「切断」と同じ。\*蒐集…「収集」と同じ。\*制札…立て札。\*畢竟…「結局」「要するに」の意。\*茶盃…「茶碗」と同じ。\*民藝…「藝」は「芸」の旧字体。民藝とは、一般の人々が日常生活で使う衣服、食器、家具などの工芸品のこと。柳宗悦の造語。

問一 傍線部①の「横」と「縦」は何を意味しているか。次の中から適したものを選び、符号で答えよ。

A 「横」は即座を、「縦」は徐々に意味している。

B 「横」は永遠を、「縦」は現在を意味している。

C 「横」は時間を、「縦」は空間を意味している。

D 「横」は反復を、「縦」は唯一を意味している。

E 「横」は他力を、「縦」は自力を意味している。

問二 傍線部②⑧のカタカナを漢字に改めよ。

問三 傍線部③の意味として適したものを次の中から選び、符号で答えよ。

A 対するものがない B 多の中の一 C 基準の一 D 無限の中の一

E 始めの一

問四 傍線部④⑥の文法的働きを次の中から選び、符号で答えよ。(④も⑥も同じ働きの「より」である)

A 起点 B 経由 C 限定 D 主体 E 比較 F 始発

G 側

問五 傍線部⑤と対照的に使われている漢字一字の語を三つ抜き出せ。

問六 傍線部⑦に対して、筆者の立場を表すとしたらどうなるか。次の中から適したものを選び、符号で答えよ。

ア、一個だけということに興味があるのであって、同類が百個あるものなどには興味がない。

イ、眼前の一個に興味があるのであって、その時、他の百個のことは心がない。

ウ、一として独自に存在することに興味があるのであって、他の中に埋没したのものには興味がない。

エ、同類を数多く集めることに興味があるのであって、一個しかないものには興味がない。

問七 傍線部⑨は、どんな物差のことか。それを端的に表している箇所を書き抜くことで答えよ。(十字以内)

問八 空欄【A】〜【E】に適する語を次の中から選び、符号で答えよ。

ア、仮に                    イ、てんで                    ウ、ところが                    エ、いわば                    オ、よく